

# —3— 石川県金沢病院と石川県金沢医学所 —公立医学教育と公立病院のはじまり—

資料館客員研究員 板垣 英治

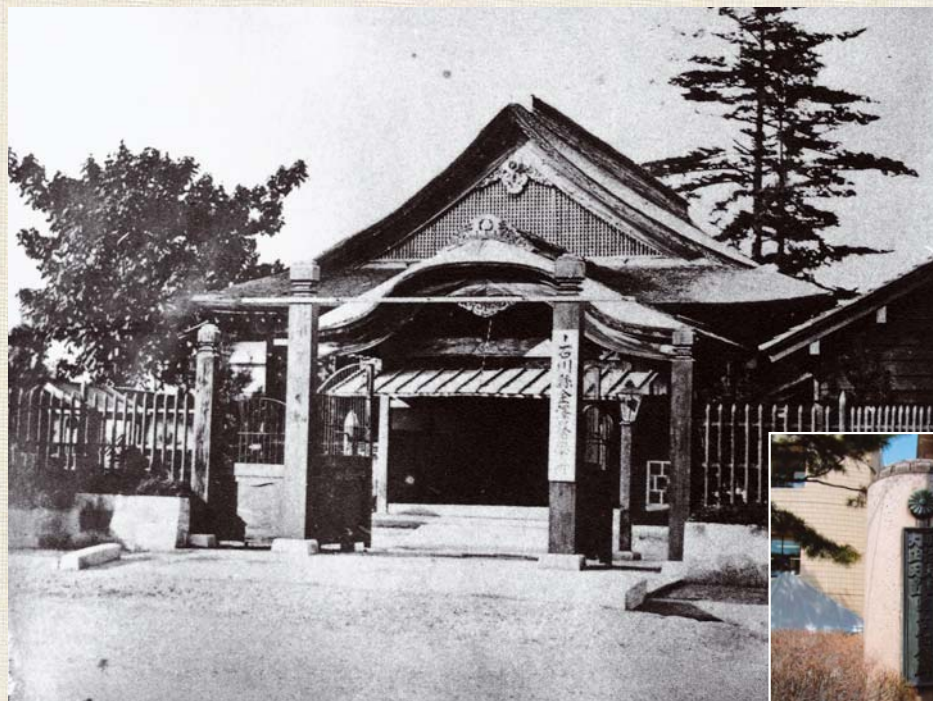


写真1：石川県金沢医学所  
「明治の日本—宮内庁書陵部所蔵写真—」  
吉川弘文館、2000より引用



写真3：行幸碑

**加** 賀藩が設置した金沢医学館は、廃藩置県のために存続の危機に見舞われましたが、所員の私費での経営で支えられ「私立金沢県医学館」として生き残りました。新たに生まれた石川県に、医学教育と病院の存続の支援を町民と共に要請しました。その結果、明治8年8月に「石川県金沢病院」に生まれ変わり、本県での最初の公立の医学教育・医療機関となり、翌年には石川県金沢病院と石川県金沢医学所となりました。写真1は当時の本医学所の姿を写す貴重なものです。

病院長に大田美農里、医学所学長に田中信吾が就きました。スロイスの帰国後、オランダ・アムステルダムでの新聞広告により応募のあったホルトルマン（J. C. Holtermann）が新たに雇用さ

れ、明治8年8月に着任しました（写真2）。ホルトルマンは有機化学、眼科学、外科学、産科学など8教科の講義を行っていました。彼は教育熱心であり、その講義は非常に緻密なものであったことがその講義録から読み取れます。

例えば、有機化学では基礎から薬用天然物、糖類、タンパク質等の生体物質の化学、生理化学、さらに発酵化学にまで及び、パスツールの微生物（顕微鏡的動植物と翻訳）による糖の発酵説を紹介していた事は注目されることです。また彼は外科を得意とし、当時の「外科患者治験録」によれば、16例の乳癌患者の治療を行っていたことが記されています。明治9年に富山と福井に分院が開設されました。金沢医学館の第一回の入学生であった藤井貞為（理学）、稲坂謙吉（生理学、動物学）、不破鎖吉（植物学、薬物学）、藤本純吉

（病理学、内科学ほか）も巣立ち、教育と診療にそれぞれ携わっています。

**明** 治11年10月に明治天皇は北陸巡幸で金沢を訪れ、3

日午後にはこの金沢病院・金沢医学所を視察して、講堂での待医と生徒との人体解剖についての問答をご覧になっています。その際の様子が「石川新報」明治11年10月4日版に掲載されています。大手町の現在の石川県健康センターの前庭には、この御巡幸の記念碑（写真3）があります。

明治12年9月には現在のNHK金沢放送局の所に「石川県金沢病院」が新築落成して、医学教育と疾病治療の機関は分離しました。なお、明治9年6月に金沢医学所付属薬学科が設置されて薬学生の募集が行われ、薬学教育が始まりました。



写真2：ホルトルマン  
（医学部記念館蔵）